



| | |
|--------------|---|
| Title | 対談『清朝考証学の研究』（下） |
| Author(s) | 加地，伸行；近藤，光男 |
| Citation | 中国研究集刊. 1989, 8, p. 34-48 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/61146 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

対談『清朝考証学の研究』下

著者 近藤光男

読者 加地伸行

〔承前〕

加地 ここ、重要なところですね。御著書「およそ戴震の学問には、はじめに何か原則を樹ておいてあとは個々の事象に対して演繹的にその説で通すような性格が感ぜられる」（三一九頁倒数四行）と。

近藤 ここまではもう、内藤湖南以下、倉石（武四郎）先生・吉川（幸次郎）先生、皆おっしゃっていることです。

加地 で、ここからあとですね、結論がやっぱり先に何かあって、結論の化粧に論証がその前に出てるということありませんか。

近藤 それが言いたいんです。

加地 そうでしょう！

近藤 そういうふうに読んでいただければ。

加地 ほんとで、安心しました。いい読者でしょ（笑）。ふつう清朝考証学いいましたら、帰納的に述べていって結論に到達したというような理解をしますね。今の自然科学の連中が、実

験していったところとするのと同じようにですね。ところがそうではなくって、むしろ論証はお化粧のプロセスのようなところだと。これ、清朝考証学の位置づけが随分大きく、変わりますよ。

近藤 ええ、従来のイメージの転換。

加地 変わる。これ、もうちょっと詳しく説明された方がいいと思いますよ。

近藤 ああそうですかねえ。いやそれも、事実でこうやって押しつけとけばね、先生のようにその、すぐれた読者には、私が下手な言い方するよりも、それ以上にわかっていただけると。

加地 いえいえ、私わかりませんよ（笑）。私はミィーハーですよ（笑）。

近藤 そうおっしゃらないで。

加地 先生、著者はもう少し親切にお書きにならんと。そこら辺はねえ、勇み足でもいいと思うんですよ。やっぱり、はっきりともう少し、あの、実証もヘチマもなしにお書きになられた

らいかがでしょうか。これ、戴震の学問を通じて、清朝考証学の本質の所へ入っていく。見事だと思っんですねえ。ですから帰納とか演繹とか言ったって、そんな単純なものじゃないんだということ、このところ、いつか一べんまた、『統清朝考証学の研究』という風に。

近藤 いやあ、むつかしいでしょうなあ。

加地 あるいは清朝考証学の全体的な……全体像の学問ということの議論の中でですね、こういうところを、もう少し自由にお書きになられたらおもしろいんじゃないかと思っんです。そうなった段階で、もうそれは文学の研究じゃなくって思想史の研究となると思っんです。さていよいよ「戴震の経学」という大論文です。

近藤 ははあ。

加地 これ、いい論文ですねえ、大変失礼な申しあげかたですけども。

近藤 とんでもございません。

加地 戴震について非常によくわかりました。それで、その三二九頁「以明例」のですね、この戴震の王鳴声あての書簡文の訳ですが……「例」を法則という風に訳していらっしやるんですけども。

近藤 ああ、いやこれがねえ、大変だったですよ。結局は吉川先生のお教えに従ったんですよ。ここは多分、『日本中国学会報』（二七号）に出ていたものと較べていただくと違っると

思っますね。

加地 あ、そうですか。

近藤 ええ、つまりこれね、「以て例を明らかにせん」なのか、それともその、何だっけな、この手紙の読み方全体、懸命に考え、山井（湧）さんの意見も、お知恵も借りてるんですが……

加地 もう一つの方はどうなんですか。

近藤 えーっとね。恐らく「明らかな例」を挙げることにしようぐらいにしてたんと違うかな。

加地 研究の「例」を。

近藤 ー。

加地 「例」と「法則」とは全然違っますよ、先生。

近藤 ええ、ですからねえ、ものすごい違いです。

加地 違っます。で、先生、これを法則とされたわけですね。

近藤 これねえ、特に吉川先生の御意見だったと思っますけども、私自身やつぱり今、自身ですつと全部見ますとね、こら絶対、法則やとね。

加地 はあ、こらすごいことですね。

近藤 いやー、加地先生、さすがに真つ先にここチェックされたのはすごいですよ。ここが要（かなめ）ですよ。

加地 はあ。

近藤 吉川先生も真つ先にここおっしゃってました。

加地 あーそうですか。はあ。これ、法則と例とは全然意味違っますからねえ。戴震の評価をされる時に、何ていうんでしょ

うか、先生のお仕事でこれが取りあげられることになるんでしょね、と思いますですね。

近藤 はい、こういう学者の文章の翻訳ということ考えちゃいますよね。だから言葉で訳してもしようがないということです。中身が問題です。

加地 中身、そうですね。この「例」という漢字だけ見たって出ない、この訳は。やっぱり戴震の全体を見てみてこの訳が出てくるということですね。それじゃ、この訳は非常に重い。

近藤 ちょっと先走るかもしれませんけど、この手紙全体がですねえ、戴震はまさに、研究の原則を、あるいはその、研究の精神をねえ、原則を超えた研究の実態を、王鳴盛に説いてるところが王鳴盛は最後まで受け入れないからわからない。で、専ら訓詁の次元で。

加地 「例」の次元で述べてると。

近藤 そうそう。まさにそう。

加地 「例」の次元でなくって、法則の次元だということを言いたかったんでしょね。しかしこれこそ、注釈が要りますよ。このごろの若い人は、「例」、あ、近藤光男が法則と訳したから法則でいいこうと。

近藤 ああ、それは困ります。

加地 で、……三三九頁九行目ですが、ここも重要な訳をしてらっしゃいますねえ、「陸徳明釈文音切無し」のところ。

近藤 「音義を示しません」。

加地 いえ「音切無し」でしょう。

近藤 あ、原文はね。

加地 ええ。そして「音義を示しません」と訳されたんですね。つまり反切を示して、それで意味はこういう意味だとしているんだと、陸徳明は。だから、音義ということでしょう。

近藤 はあ、はい。

加地 これはもちろん我々わかるんです。だけどこれ、音か義かという問題の議論のところでもあるんでしょう。

近藤 はあ。

加地 だから、これは先生、誤解を与えていると思います。……後世の学生には。

近藤 僕にすればね、翻訳とは、かくあるべきものだと。

加地 ああ、そうか。こういう意味でのとらえ方があるから音義と訳さないかと。

近藤 はい。

加地 はあ。いや、それはね、私のような読者にはわかるんですよ(笑)。しかし読者にはミィハーがいますからね(笑)。でね。三三二頁の訳あるでしょう。漢文が二行あって、「漢唐の学者たちは云々」と。で、「光は充なり」という訓詁です。この訓詁はやっぱり難しい訓詁だと思われませんか。「光は充なり」というのは。

近藤 んーっと、決して珍しい訓詁じゃあないと。つまり注を要しないものと考えた、とみたんです。

加地　そうですよ。私、「光は充なり」、すぐわかりました。なぜか。近藤「光」男ですよ。

近藤　えーっ。

加地　「光は充なり」ですよ。

近藤　からかわないで下さいよ（笑）。

加地　光は光とも読むじゃないですか。

近藤　あ、なるほどねえ。

加地　御自分の名前の「光は充なり」というのを訓詁をたどってですね。（笑）

近藤　言われるまでは気がつきませんでした。自分の名前忘れてました。老荘です。「名」を忘れてました。

加地　弁ゼんと欲して忘れておられたんですね（笑）。でもね、ミ－ハー読者は、ああ自分の名前だから一生懸命やってるんじゃないかて（笑）。この前後ものすごくおもしろかったですね。

近藤　ああそうですか。この論文をおもしろがっていただけるとのは、余程の学力の方だけですねえ。

加地　いえいえ。そして、やがて大逆転があるでしょう。これスリラー。先生、これ憎いなあ。最後にどんでん返しがあるでしょう。始め伏せておいて。まるで推理小説ですよ。

近藤　はい。

加地　さっきの『考工記図』のおもしろいですけども、この「戴震の経学」の最後はいいですねえ、はあ。先生、テレビでどんでん返しのサスペンスドラマ見過ぎじゃないですか。

近藤（笑）　どうも、定年後の生活を見透かされたような感じが（笑）。

加地　どんでん返し。どうもそんな気がするんですねえ、これは先生の書齋に入らんとわからんわけですよ（笑）。読者にね、どんでん返しをなんていう、これサービスピ精神ですねえ。

近藤（笑）

加地　おもしろい。最後に先生、推理を立てられてね、この王鳴盛の手紙が偽りかどうか。これはおもしろいですねえ。どうでしょう、これは偽りかどうか、どちらに与されますか？御自身がお書きですけど（四七〇頁に「この両氏葛藤の実態についての私の一つの推理」、戴震が王鳴盛に出した手紙に対して、王鳴盛はわしゃあそんなん見とらんと言ってますねえ）。

近藤　見とらんと言ってますね。

加地　戴震は書いてるでしょう。「かもわからん」てなことお書きで、何か最後は、どっちいってしまいかわからんような（笑）。

近藤　やっぱりその、私はもらったと思うんですねえ。

加地　やっぱり、王鳴盛が嘘をついておると。

近藤　はい、もらっていると。その点では嘘ついてるんじゃないかと。

加地　その時、王鳴盛と戴震との関係はどうでした？

近藤　ええっと、それは王鳴盛の方が高いんじゃないですか。ああ、翰林院編修と一介の布衣でした。

加地 王鳴声は戴震に対して、この田舎者とかいうような。

近藤 ええ、それは当然ですよ。

加地 やつぱり、そういう感じですか。

近藤 と思いますねえ。安徽の山奥からのこのこ出てきた。しかも、本当にもう、乞食みたいな格好で都へ出て来たという記述でございますからねえ。銭大昕がそう書いてます。

加地 ああそうですか。

近藤 王鳴盛って人は、これ最初は倉石先生からきいたんですが、後で知ったら、『嘯亭雜錄』に出てるんですけどねえ、王鳴盛は金持ちの門に入る時にはいつも、こう何か物を抱えこむような格好して門をくぐったと。で、誰かがなぜかって聞いたら、いや、金持ちの福にあずかって自分も金持ちになれるようにと言ったと、確かそんな話知られてるんです。

加地 どちらかというとやや政治的な、そういうセンスあったわけですねえ。

近藤 あると思いますよ。いかにも中国人的な……いや、そう言っちゃまたこれ叱られるな。汚ないといったら少しおかしいけれども、清貧な学者からなら、饅頭を買うような性格が、王鳴盛にあったという、ちょっとした証拠あるわけです。

加地 わかりました。次に段玉裁に入りたいと思うんですが、戴震の場合は、例の『尚書』の堯典の問題を取り上げてひとつのところを、集中的に論じなされている。これは、つまり代表的な問題ということでここから戴震の全体像を見るとということ

ですね。ですからよけい、一点集中というんですか、そのことによって浮き上がらせていこうという、こういう方法自身がおもしろいですね。

近藤 ありがとうございます。これは清朝考証学の方法に過ぎないので、私はそれをまねしているに過ぎないんですが。

加地 ふつう段玉裁のあちこちのところをつまみ食いして書くとか、戴震のをつまみ食いして書くとかでしよう。そういう意味で、これはこの方法自身が先生の清朝考証学流の仕方をなさっているとするれば、一点集中主義と言いますか、それだけに精密です。で、清朝考証学全体の問題をとりあげなくとも、このことだけで非常におもしろいですね。で、「段玉裁の学問」の三六一頁七行目、これはおもしろかったですね。つまり、学問がわかる人、書を読める人に対して、読むことすなわち暗誦と心得ているひと、これはまさに、俗にいう「論語読みの論語知らず」でしょうね。これは、永遠の問題ですよ。これからも起こって来ると思いますね。ですから、これはことばを読むことに関する本質的な問題をとらえていたということですね。

近藤 まさに「読書の学」なんですね。

加地 これはやはりすごいですね。それから三六二頁ですけれども、この線でいきますと、ふつう音読する場合には、『論語』の「論」は「論」と読みますが、段玉裁流に読みますと、「論」ということになりますか。

近藤 皇侃の『論語義疏』の頭に、平か去か議論してますね、

どういう資料でどういう結論だったか忘れましたが、えらい丹念に書いてませんでしたか。

加地 はい、いくつかの意味を集めましてね、「論」の意味を。だからこの段玉裁流にいうと、これはもう論^{lun}というふうに二声に読む必要はないということですか。「論」の字に異なった訓解を与えているのは、孔子の当時、論の字になんら異なった意味はなく、平声去声の別もなかったことに思い及ばないでいるのである。」と。

近藤 これは「六書音韵表」で確かめてみます。すみません。宿題にしてください。

(近藤注:「六書音韵表」巻一に「古四声説」があり「古に去声無し」という説がある。それがこの稿を書いたとき念頭に在って、なんの疑いもなく「平声・去声の別もなかったこと」と訳した。段氏は魏晋になって平声の多くが、仄声に転じたと考えているので、梁の皇侃があんな議論をするのだ、というのであろう。)

加地 私は中国人の使っている言語、とりわけ漢字が彼らの思考を決定している大きな要素だと思っっているんです。ですから、言語問題のところに踏みこんでくる時には、『説文』の「六書音韵表」を使って『説文解字』を意味づけをされている、これは非常に勉強になりました。ここところは、形だけでなく音がそれをというプラスをしてらっしゃる。

近藤 頼(惟勤)さんは、『説文』というものは音義の書であ

るという考え方をしておられて、僕のこことくいちがうわけなんです。しかし、認めて下さったんです、この考え方を。私は段玉裁の考え方がどうかということで議論してますから。だから段玉裁は、『説文』は字形の書である。だから、我輩が字音の書を作って、つまり六書音韵表を作って『説文』にくっつけることによって『説文』が「経」になると。

加地 そうか、完全な形になって。

近藤 ちょうど戴震が『屈原賦』に注をつければそれが『詩経』に近づくように、そういう意識で段氏は『説文解字注』に「六書音韵表」を附刻した。

加地 『説文解字』そのものの解釈の問題になってきますね。結局、段玉裁の考えた『説文解字』が何であつたかという。

近藤 例の「何に从ふ、何の声」、それは、音と見れば音でしょうが、それは字形を説明するために、字には当然音があるから、六書の説明のために附けるまでなのであって……。『説文』は字形の書だと。だから我輩がそこに字音の体系を示すことによってこれではじめて『説文』は全きものになると。

加地 そうすると、これは重大な問題になる。『説文』とは何かという問題になってくるわけですね。

近藤 これで、ここでも許慎を超えるわけですね、さっきの王鳴盛の立場と違って。鄭注を墨守するのが王鳴盛、そんなものにこだわってたらあきません、というのが戴震。

加地 逆に先生、それは不遜な考え方ですね。

近藤 それに關してはね。でも、その不遜あるが故に「経」が生きた。乾嘉の時期以降に「経」が生き延びた。つまり、今もし「六書音韻表」なかりせば、段玉裁の注なかりせば、『説文』は死んでいたかもしれないと。

加地 ある時期の單なる語源書に終わってしまつて。

近藤 はい。しかしつまり、やっぱり現在に生かしていると。

加地 では、三七一頁の最後、「なお戴震の引く古人の言葉、その原文は「友原有相師之義」である。古人とは誰をさすかを知らず、従つてこの句の読み方にも不安がある。」と。この「相師」、「論語」のことはと違ひますか。

近藤 へーえ。

加地 『論語』に、目の見えない音楽師に、ここは階段ですよ、ここは座席ですよつて孔子が教えますね。すると弟子の子張がそういう態度でいいのかつて聞いたとき、「子曰く、然り。固より師を相く（あるいは「相くる」）の道なり」。この「相」を「導く」と読んでいるのは馬融です。鄭玄は「扶ける」です。だから、「友原より師を相く、或は、相くるの義あり」じゃないでしょうか。意味的にはもちろん、先生のおっしゃる互いに師とすることだと思ひますけれども。師とすることというよりも互いにたすけあうということ。

近藤 に読みたいですよ。

加地 戴震はこの手紙では段玉裁に対して、友人なんだと、学問上においてお互いに助け合つて勉強するんだと言っている意

味じゃないんでしょうか。

近藤 おもしろいですね。御説明だと、この「師」もやはり楽師の師に読むわけですね。

加地 そう思うんですが。上下でなくてお互いに助け合うもんだと。

近藤 孔子が楽師をたすけたようにたすけると。

加地 はい、私はそう読んだんですがね。

近藤 はい、わかりました。

加地 それでは次は王念孫ですが、「戴震の経学」とあつて、その次「段玉裁の学問」「王念孫の学問」と、こういうふうにお書きですが、この王念孫の場合もまた同じく、ひとつのテーマをお決めになつて、これもさきほどおっしゃつた清朝考証学の方法ということで非常におもしろかつたですね。

近藤 ありがとうございます。

加地 で、この中の、不思議なのは三七八頁なんですが、王念孫のような大考証学者がですね、『戦国策』について、なぜテキストのこと書いていないんですか。

近藤 えーと、ちょっと虚をつかれましたね。でも必ずしも「触れてない」ことはなく、三七八頁全体、とくにおわりから一、二行めに、ことわりがあります。私が著わしました『戦国策・上』（集英社・漢文大系23）巻首「解説」で詳考を加えた姚本でも、その雅雨堂本にかかわるめんどろな説明と人間関係を述べることになるので、避けたものでした。

加地 わかりました。それから、これはすごかったですね。三八四頁の例の馬王堆から出てきたもの、こういう帛書がでてきてですね、王念孫の推理があたっていたというのは。それから、三八九頁の終わりから五行目、これもやっぱり段玉裁と同じということなんですか。王念孫も同じく筆者の心を読む、そういう意味では同じだと。

近藤 はい、王念孫の場合も出てきたという報告でございます。

加地 それが結局つながるのが、三九〇頁五行目ですか、「好學深思、心にその意を知る」と、皖派の行きつくところはここにあると。それから、教えていただいて私始めて知って非常におもしろかったのが、この四四五頁一行目です。阮元がこんなことしてるのは非常にもしろい。詁経精舎での試験にテキスト・ノートの参照を許していたということ。科挙用の勉強をさせなかったというところは。

近藤 はい、暗記じゃないと。

加地 それから、四五〇頁の終わりから六行目あたりから終わり二行目あたりまでの、音が近ければ大体同じ意味を持つ、と。これ、藤堂さんの単語家族の考え方に似てますね。こういうアイデアはやっぱり持ってたんでしょか。

近藤 はい、溯れば焦循なんですね。より詳しくは、『吉川幸次郎全集』巻二十と書きこんでますけれども、この「矢」の字について相当詳しく述べておられます。吉川先生は確か「描写の素材としての言語」という論文でいうか、やっぱり書かれた

ものがありました。それにこれはやっぱりもう、おっしゃるように、藤堂さんは大変得意だったですよ。僕にはじかにいろいろ談話で話されてね、よく。

加地 単語家族という。

近藤 はいはい、それからだんだんとまとめていかれて。

加地 アイデアはこっからかなあと思って。

近藤 だと思います。一番目といえるかどうかは分りませんが、まず、焦循だと思います。

加地 藤堂さん、どっかで書いておられますか。

近藤 どっかに書いてられると思いますね。

(近藤注：例えば藤堂氏の極めて初期の著『中国語語源漫筆』大学書林・語学文庫・52頁)

加地 これ見たら、藤堂さんの舞台裏が見えたというか。さてそれでは、読者として総括的な問題のところできくつかお話ししたいと思うんです。まず先生の御本を通して感じましたのは、朱子学との連関ということがほとんど触れられていない。これはどうしてなんでしょうか。

近藤 いやいや、勉強してないからなんです。

加地 いやいや、そういう教科書的な答えじゃ困るんで、(笑)もうちょっと理由をですね、つけていただかんことには。あの、当時の科挙の試験は朱子学を学ばないとパスしませんね。清人は若いときまず朱子学を勉強して、それから考証学になるんですよ。それ先生どういうふうに。

近藤 そういえば、戴震が幼なときに、『大学』の「右経一章」について塾師を問ひ詰めたというのなんか、それですね。

加地 劉宝楠の『論語正義』なんか見えますとね、論証してどうもうまいこといかなないときがあるんですね、自分の説明が。そしたら、「旧説に曰く」言うて、それでちゃんとうまく説明つくんですよ。旧説って何かと思ったら朱子の説なんですよ。ひどいもんですね、あれは。

近藤 それは、ひどいかどうか。つまり、朱子に対しては必ず敬意を表しておりましてね。一言、「朱子を除いては」ということわりが、私「漢学師承記」で覚えがありますね。なんか宋儒の悪口を言うとき、宋儒を批判するときに、朱子を除いては、こうと、これは覚えがあります。

加地 なるほど。清朝考証学者といえども、幼年期、少年期における学の根底は朱子学だと思っんです。科擧の試験を目指して、どこまでいけるかは別として、ともかくある程度は朱子を勉強しなければ仕方がない。すべてはそこからでしょう。幼年期の体験っていうのは大きいですよ。

近藤 清朝考証学における朱子学に対しては、例の協同研究のときの討論会のしめくりに前野（直彬）さんが非常に上手に全体をまとめた発表をしてくれた中にありましてね。今も印象的なんですが。たとえば「格物致知」の「格」をどう読むかと、そこへまた山井さんも意見を加えてくれましてね、あれをいったいどう読むのか。「いたる」か「ただす」かその読みかたに

よって、そこに清朝考証学の本質があることになるのかないのか、そういう非常に微妙な問題が。

加地 あるんですね。それから朱子学にですね、ステップを踏んでいけば物事がわかるんだという確信があるでしょう。これは精神的には清朝考証学もいっしょだと思っんですよ。順番に追っていけば真相がわかるという考え。私は考証学と言ったって思考方法の根底には、朱子学の「物にいたる」、順番にいけば聖賢の域に至ることができるといふ思考、それがやっぱりあるような気がするんですけれども。どなたも朱子学と考証学との分離こそ意識せよ、連関はおっしゃらない。

近藤 私は分離したつもりはありません。今更ですけど。むしろですね、それこそ語類の形でどうか、あるいは朱子学の亜流的なものは問題にしませんけど、朱子その人に対する敬意は終始失つてないと思っんです。ただ、自分が聖人になれるんだ、なるんだ、などという考えは清朝の学者たちにはみじんもないんですね。あくまでも聖人の心への肉迫…。

加地 はい。それは先生が最もおっしゃりたいことですね。その次は、「文学」ということばの問題なんですけど、文学いうてもイメージはいろいろあると思っんですね。例えば、小説の類の文学の系統もあればですね、いわゆる古典詩といひますかね、教養人が必ず心得る詩という文学の問題、あるいはもっと広く、まさに吉川先生がおっしゃるように、ことばで書かれてあるもの、という意味の文学という意味ですね。

近藤 あるいは今の西洋文学の意識における文学。

加地 はい、虚構としての文学ですか。そうすると文学という場合に一体、中国文学の研究者が、清朝考証学を、先生を含めて文学を言う場合、どの線をお考えですか。文学ということばがでてくる場合、いつもひっかかるんです。ヨーロッパ人は何もひっかからんのじゃないですか。我々はいつもひっかかる。

近藤 いや本当ですね。私なんかが一番勉強でわからないのはヨーロッパの文学の概念なんです。これはそれこそ八高時代に土居光知の『文学序説』（岩波）か何か読んだ程度。我々の高等学校時代におけるそういうイメージはあるけれども皆忘れちゃっておりましたね。むしろ今、挙げていただいた三つ目の吉川先生の文学、ことばとしての文学、つまり清朝考証学ってのはですね、あくまでことばと密着した文学だと。生きた人間のことばの研究であって、でそれが、段玉裁で考えたんですけれども、人間の学だというと、それこそはなはだおこがましい。おこがましいというよりも、軽率に使えないことばですけれども、西洋哲学の表現から言うところのことばですけれども、やっぱり人間研究の学なんだと、ことばとあくまでも密着している、と、そういう意味での文学と。

加地 道具としてのことばじゃなくて、人間の心を伝えることばであると。

近藤 言霊。いや言霊なんて言うときた・・・。

加地 それ私重要だと思ひんです。ヨーロッパ人の言うてるこ

とばというのは依然として道具的な意識があるんですよ。しかし、物として見ないで、人間が使っているものという、場所をもとにしているものと、私はアジアの言語はそういうものだと思っているんですけれども、そういう人間に繋がっているという意味のことばということですね。ところで我々の普通のイメージはですね、清朝考証学と言いましたら、例えばですね、過去に皆がわからなかったことを、或いは間違っていたことを明らかにしてきたと、事実を白日の下にさらしてきたという、そういうイメージはやっぱりあるでしょう。考証学者の行った仕事は。どうですか。

近藤 清朝考証学に対する従来の認識では要するに役に立つもんやと、その成果を利用すればどの研究にも便利なものではあるという認識ですね。しかもそれはまだましな余程いい認識でしょうかね。

加地 今度の御本でそれが打ち破られたと思います。一般にはまさに考証オンリーというイメージでしょう。

近藤 それも役に立つところまで認識しているかどうか。加地 そこまですらいかない。そこまでいかなくて、要するにいろいろ事実をあれこれ言っているんだという、何かそんなね。近藤 本の虫になるやつの学問だとかね。そういうことでしょうか。

加地 ええ、それを先生がこの本の中でそういうような見方ではなくて、もっと生き生きとした人間が営む営為といえますかね、

ことを通じて、とされたということに、私は非常にその、清朝考証学に対する面目を新たにされたと思ひまして、非常におもしろかった、いやおもしろかったなどと申しますと失礼ですね、すみません。どう申しあげたらいいのかな。

近藤 いや一番ありがたいことばだと思いますね。これをおもしろいと思つて読んで下さる方は、それこそ清人清儒せいひんせいじゆの学問の水準にある方であると思います。

加地 とんでもない。それと文章が明晰で読みやすいですね。御書名、このタイトル見ましたら、何かとつつきにくいと思うでしょうけど、そうじゃないんですね。漢学臭がまったくなく、非常にわかりやすく、また、さきほど申しましたようなサービス精神に富まれて説明を詳しくしてらっしゃる。原文がある場合は必ず書き下し文、或いは翻訳という形でされてますから近藤 一か所だけ例外があつて、たちまち加地先生に突かれました。

加地 いやいや。この非常に読みやすいということと、それから人名や書名が多い割にはあまり抵抗がない。本当ですよ。それは、上手にお書きになっているからだと思うんですけども、非常におもしろかったですね。そしていぶん多くのことを学ばせていただきました。本当にありがとうございます。

近藤 ありがとうございます。

(完)

「補記」西暦年への換算について

加地 伸行

『集刊東洋学』六〇号（一九八八年）に、浜口富士雄氏の書評「近藤光男著『清朝考証学の研究』」があり、丁寧に論評しているが、最後に次のように記している。

「戴震の生年を西暦で表記するならば、一七二三年でなくて一七二四年とすべきである。なぜなら、戴震の誕生日の「雍正元年十二月二十四日己巳」は「西暦一七二四年一月十九日」に当るからである。この誤りは「研究姿勢にもかかわる」と。

つまり、旧暦を西暦に換算すれば、一七二三年は、旧暦「雍正元年十二月五日」で終っており、一七二四年一月一日は旧暦「雍正元年十二月六日」に当るので、誕生日が旧暦「雍正元年十二月二十四日」ならば一七二四年の中にはいるというわけである。西暦との対応という点で言えば、なるほど事実はその通りであろう。しかし、基準を西暦に置き、西暦を絶対化するとき、思わぬやっかいなできごとが起るのである。たとえば陳垣の名著『二十史朔閏表』をひもとくと、西暦一年は、前漢の平帝の旧暦「元始元年」に相当する。ところが、その旧暦「元始元年一月一日」は、西暦「一年二月十一日」に当る。

そこで陳垣は、備考欄に、西暦「一年一月一日」は、その四十二日前、前年の旧暦「元寿二年十一月十九日戊寅」に当ると記している。すると、「元寿二年十一月十九日」から「元始元年二月十日」までの四十二日間は、いったい、西暦一年なので

あろうか、西暦前一年なのであろうか。浜口氏流に言えば、当然西暦一年ということになる。

四十二日間と言えば、約一ヶ月半である。ところが、一般的な年表では、元寿二年を西暦前一年、元始元年を西暦一年と記すのみであって、ほとんどこの四十二日間について触れない。

しかし、あえて四十二日間を西暦一年に算入するとしよう。

すると、ことは元寿二年の問題だけにとどまらない。この四十二日分は、当然、元寿二年の前年の元寿元年へ、さらに元寿二年の前年の建平四年へと、食いこむ。そしてこのあと、閏月が何度かはいつてくるから、私のように暦に弱い者はお手あげであり、そのあとがどうなつてゆくのか、よく分らない。たとえば、評価の高い新城新蔵著『東洋天文学史研究』（弘文堂）の「春秋長歴」「戦国秦漢の暦注」を、むつかしいので頭をひねりながら何度も読んだが、正直言つて話がよく分らない。四十二日分の前年への食いこみということに氣にするだけである。

しかし、西暦年などというのは、時を測る便宜上の尺度の一つにすぎないのであつて、その正誤で研究全体の評価が変わると思わない。厳密な西暦表記ということで小児病的に換算してゆけば、いわゆる西暦前のことについての多くの論考が正誤の網にひっかかることであらう。しかし、それによって珠玉の諸論考の価値がさがるわけではない。

また、あえて言えば、西暦一年はキリスト誕生の年であるというので、西暦五二七年に、宣教師のロニス（若尼斯）とい

う者が西暦の採用を言いだしたとのことである。

ところが、考証的研究では、現行の西暦一年は、キリスト九歳の年であるという。なんのことはない、はじめからサバを読んでいたわけだ。「西暦紀元」の定義として、もし「西暦一年をキリスト誕生の年とする」ことを厳密に絶対化するならば、われわれが使っている西暦年数に対して、常に八年を加えるべきである。しかし現実にはだれもそんなことをしない。

今日使用の西暦は、一五八二年にグレゴリオ十三世が改暦（十月五日を十月十五日として）して作ったものである。そこで陳垣は同書「例言」で、一五八二年以前は、旧暦のほうが、かえつて史実に対して正しいと判断している。グレゴリオ暦までの西洋暦に、いろいろと矛盾や問題があるからである。さすが陳垣は一代の歴史学者であり、見識がある。そして陳垣は、一五八二年以後はグレゴリオ西暦を基準にしようとしている。

また陳垣の「例言」と表中の備考欄とによれば、グレゴリオ西暦を各国が使いだしたのは比較的新しく、次のようである。一五八二年、イタリー・イスパニア・フランス・オランダ。一五八四年、ゲルマン民族。一六九八年、デンマーク。一七三一年、スエーデン。一七五二年、イギリス。一八七三年から、日本（実行のため明治五年十二月三日を六年一月一日に充てた）。ロシア、一九一八年。なお、イスラム教徒は西暦など使わない。あくまでもイスラム暦（回暦）である。

計算の方法が違うので、旧暦「二月一日」と西暦「二月一日」

とが常に食いちがっているのは当然である。だから、旧暦のだいたい十一月ごろあたりから、翌年二月ごろにかけておこったできごとを、西暦年に充てようとすると、たとえば『二十史朔閏表』や『三正綜覧』を使って換算することが必要である。逆に言えば、仮に西暦の充てかたを誤ったとしても、それを大発見として鬼の首でも取ったかのように言うべきではあるまい。

自分がすべて換算したのではなくて、所詮、われわれはたとえば『二十史朔閏表』や『三正綜覧』のお蔭で換算できるにすぎないからである。浜口氏も「手近な工真書『中国歴史紀年表』」（書評中に引用）などという安物を使わず、たとえばこの『二十史朔閏表』を使うことを勧める。しかし、同書は、前漢の成立から始まっており、前漢以前に関しては、他に依りどころを援用するなどしなければならず、正確な換算はそうたやすくはない。『三正綜覧』（日本内務省）は始皇帝の三三年（西暦前一四年）から始まっており、それ以前は、たとえば前引の『東洋天文学史研究』の附録「図表」（春秋・戦国期など）などに依ることになる。それでもまだ定説ではない。それを推してあえて厳密に換算を行なったところで、どれだけ「研究姿勢にもかかわる」（浜口氏引用のことば）というのであろうか。大げさすぎる。肝腎なことは、その著書の大河の流れを見ることがある。

前漢末の旧暦「元始元年」の場合、それを「西暦一年」に当てたということで、両者の関係を表わして十分である。まして、

人間の年齢を示すとき、東北アジアでは、数え年という独特の方法があり、かつてはよく使われた。これは、満年齢よりも、ある意味では合理的なのである。たとえば、西暦一年の一月一日生れの者も、同年の十二月三十一年生れのものも、実質一年の差があるものの、その西暦一年に関しては同じく一歳（当歳）とし、翌年一月一日に全員を二歳として、同一世代を表わすわけである。それを西欧流に、野暮に満何歳何個月何日と（分析的）に記すのが正しいという理由はどこにもない。それは西欧人流の表現にすぎないのであって普遍性はない。同一年内に生れたものを同一クラスにまとめるという（分析的）な発想こそ中国人の考えかたであり（拙著『中国論理学史研究』参照）、数え年というのは、その一つの現われであろう。

近藤氏とこういふ話をしあつた。雍正元年を一七二三年と記すのは、一七二三年に相当するという両者の関係を表わすにすぎない。戴震の場合、便宜上、生年の雍正元年を一七二三年に充てたのであり、そうしておけば、数え年を考える場合、混乱が起らない。それをたまたま生年月日まで分っていたことに依り、一七二四年に修正すると、段玉裁の『戴先生年譜』に記している毎年の「何年何歳」という数え年と合わなくなってしまう、研究に不便か、あるいは失敗を招くのがオチであろう、と。さらにあえて言えば、一七二三年であらうと一七二四年であらうと、戴震の伝記研究をするという特定の問題以外、その相違はたいしたことではない。年月日の相違を問題とするのは、

そのことによってたとえば或る特定文献の前後関係とか、西暦とか、そういったことにかかわるところの、決定的証拠の意味を持つようなときである。人物の存在時期をたゞ示すものならば、戴震の場合、「十八世紀中ごろの人」と記しても十分である。一七二三年を一七二四年としなければ「研究姿勢にもかかわる」と言うならば、「十八世紀中ごろの人」という粗大な表現をしたとき、その研究姿勢はどうなるのか。もし「清朝中期」などと記しては、その研究姿勢は論外ということになるのか。

いま私は、西暦年に換算する問題を一般論として述べている。なぜ一般論として論ずる気になったか。それには理由がある。アジアの文化とは異質な西暦について取りあげるならば、われわれアジア人がよく知らない西暦月日の持つ問題点も同時に示すべきであって、西暦をただ絶対化して疑いを抱かないという態度に対して、私は批判的であるからである。（誤解を避けるために念を押して言えは、浜口氏がそうだと言うのではないが）たとえば西暦を絶対化する人の心情には、西欧文化をなんでも絶対視し崇拜するという、明治以来の知識人の抜きがたい劣等感や自我の未確立や自立心のなきを感じる。私は青年時代から、そういうお調子者を批判してきた。欧米文化に無条件に従うのではなくて、自分の頭で考える人間であってこそ、はじめてそ

の研究姿勢が成り立つというものであらう。

なお、川原秀城氏（岐阜大学）の御教示によれば、陳垣の『二十史朔閏表』は、汪曰楨の『歷代長術輯要』十卷・『古今推歩諸術攷』二卷を巧みに盗用したものであるとのことである。アイデアは前者から、また計算に使用した定数の表は後者から得たようである。陳垣は、『二十史朔閏表』「例言」において、汪曰楨の『歷代長術輯要』を挙げ、その始まりを「周の共和に起す。然れども魯（国）の隠（公）以後、『春秋』と合わず。史実にあらざるなり」と批判しているが、川原氏の説によれば、陳垣は汪曰楨の業績をきちんと紹介すべきであらう。

また、漢初の朔閏表については、最近の発掘による考古学的成果として竹簡の曆書が得られており、それに基づく研究を、川原秀城氏に御指教いただいた。それは、陳久金・陳美東の共同執筆による論文「臨沂出土漢初古曆初探」（『中国天文学史論文集』所収・科学出版社・一九七八年）である。同論文は、顧頡膺・殷曆・『歷代長術輯要』の推定や、この三者の比較表や、漢の高祖元年（西暦前二〇六年）から武帝の元封六年（前一〇五年）までの朔閏表を新しく作っている。川原氏によれば、現在のところ、最も信頼すべき説であるとのことである。

『清朝考証学の研究』補正表

| | | |
|--------|---|--|
| 三三／8 | 凌 ^{りょう} 廷 ^{てい} 堪 ^{かん} | 照。 |
| 一〇五／10 | 泪 ^{なみだ} 乎 ^{こゝろ} 五 ^ご 季 ^き | 一七一至一七三。 |
| 一一四／3 | 而已 ^{のみ} | 幽 ^{ゆう} 風 ^{ふう} |
| 一七九／4 | 乾隆 ^{けんろう} 十五年 | と [＊] いうことには |
| 一八五／18 | 乾隆 ^{けんろう} 十五年 | 西 ^{せい} 溪 ^{けい} |
| 一八七／15 | との [＊] 宣 ^{せん} 言 ^{げん} を [＊] し [＊] て [＊] い [＊] る [＊] こ [＊] と [＊] に [＊] な [＊] る [＊] | 實 ^{じつ} 証 ^{てい} 主 ^{しゅ} 義 ^ぎ |
| | | 鯁 ^{ぎやう} |
| | | 四〇〇／13 千 [＊] 里 [＊] を [＊] 以 [＊] て [＊] す [＊] 、 |

| | | |
|--------|---|---|
| 三三／8 | 凌 ^{りょう} 廷 ^{てい} 堪 ^{かん} | 照。 |
| 一〇五／10 | 泪 ^{なみだ} 乎 ^{こゝろ} 五 ^ご 季 ^き | 一七一至一七三。 |
| 一一四／3 | 而已 ^{のみ} | 幽 ^{ゆう} 風 ^{ふう} |
| 一七九／4 | 乾隆 ^{けんろう} 十四 ^{じゅう} 年 ^{ねん} | と [＊] いうことには |
| 一八五／18 | 乾隆 ^{けんろう} 十五 ^ご 年 ^{ねん} | 西 ^{せい} 溪 ^{けい} |
| 一八七／15 | との [＊] 宣 ^{せん} 言 ^{げん} を [＊] し [＊] て [＊] い [＊] る [＊] こ [＊] と [＊] に [＊] な [＊] る [＊] | 實 ^{じつ} 証 ^{てい} 精 ^{せい} 神 ^{しん} |
| | | 鯁 ^{ぎやう} |
| | | 千 [＊] 里 [＊] を [＊] 以 [＊] て [＊] す [＊] 」 |

四二六／5 「學海堂[＊]第[＊]子[＊]注[＊]」
 四五八／下11 四十六[＊]歳[＊]
 四六三／上20 降[＊]恩[＊] 四十八[＊]歳[＊]
 陸^{りく}恩^ん

(以下索引)

ix 「姚鼎」ニ337ヲ補入
 xv 「四民月令236」ヲ「四書釋地」ノ下ヘ補入
 xvii 「疇人摶(247)續補 247」トモニ算用
 xix 数字ヲゴチニスル
 xiii 經籍○詰序 經籍纂○詰序
 // 「空言 94」ニ「400」ヲ加エル
 「不知而作 334 338」
 「博く經史に通じ…」ノ下ヘ補入

対談(上)の正誤表

四三／下16 文選の任□[＊]
 四五／下2 漢[＊]字[＊]と 文選の任防[＊]
 四五／下13 訓□[＊]の学 漢[＊]字[＊]と 訓詰[＊]の学